磐梯山と会津の風景

八幡平マウンテンホテル　自然ガイドステーション　**髙橋　基世**

磐梯山

◆磐梯山との出会い

福島の景色を思うとき、社会人になった年の３月、配属先の新潟へ向かう高速バスから見た雪景色が思い起こされます。山間の家々の屋根に積もる雪、青空、そして初めて見る山々。窓の向こうの景色はとても静かでした。

学生時代暮らしていた仙台から不安99%でバスに乗った日を今でも憶えています。

郡山から磐越道に入りしばらくしたころ、ひときわ白く、高い山が見えました。車窓から一瞬見えた地名で磐梯山だとわかりました。南側には広い田んぼ。その先の細長く伸びる林が湖の輪郭を浮かび上がらせています。西日を受けて鏡のように光る湖面が印象的な猪苗代湖の眺めでした。

それから２年ほど仙台と新潟を行き来するのですが、磐梯山に登るのはもう少し後のことになります。「てっぺんからはどんな景色が見えるんだろう？」漠然と思いながらも当時はまだ自分が将来、登山ガイドになるとは思ってもみませんでした。

◆磐梯山はこんなお山

磐梯山の麓にはいくつものスキー場があり、冬の夜にはまるで大きなクリスマスツリーのようにきらびやかです。夏には緑の印象的な山で、山頂は空に届きそうです。

南の猪苗代湖方面から見る磐梯山は大磐梯と呼ばれる山頂と手前の赤埴山、そして右に櫛ヶ峰と、３つの頂が並ぶ整った形をしています。北側から見るとその印象は全く変わり、大きな崖といくつもの大小の湖が点在する荒々しくも美しい景色が広がります。「裏磐梯」と呼ばれるこのエリアからはかつての噴火の痕跡を見て取ることが出来ます。

磐梯山の標高は1,816m。会津富士とも呼ばれる福島県のシンボルです。

今では「ばんだいさん」と呼ばれていますが、もとは訓読みで「いわはしやま」と読まれていました。天高くそびえる様子から「天にかかる岩の梯子」を意味する名前です。

磐梯山は過去に何度も噴火を繰り返している活火山です。

記録に残る中でも1888年（明治21年）７月15日の噴火は大規模なもので、水蒸気噴火により岩屑雪崩が発生し、477名もの人命が失われました。この噴火により現在の裏磐梯が形成されました。

◆昔話に見る噴火

手長足長

磐梯山の古い名称は「わずらわしやま」「病悩山（びょうのさん）」と言います。

『昔々、わずらわしやまの山頂に手長足長という夫婦の妖怪が棲みつき、会津の空を暗い雲で覆って作物ができないようにしてしまいました。人々は大変困り、この地を訪れた弘法大師空海に手長足長を退治してほしいと懇願します。弘法大師は法力で手長・足長を山頂の岩に封じ込めます。手長足長が、今後は守護神となりこの地を守ると約束したことから、磐梯明神として祀り、山の名前は磐梯山に改称されました。』

手長・足長が操る暗雲は噴火による火山灰や噴煙のことだったのでしょう。山のご機嫌によって人々の暮らしが左右される、まさにわずらわしい山だったのです。物語からは火山とともに生きてきた当時の人々の苦労や山への畏怖の念が感じられます。

◆猪苗代湖

猪苗代湖の畔に立つと、向こう岸ははるか彼方。目をつむると波の音はまるで海のようです。猪苗代湖は琵琶湖、霞ケ浦、サロマ湖に続いて日本で４番目に大きな湖です。猪苗代湖が出来た時期ははっきりとわかっていませんが、およそ３万年から２万５千年前と推定されています。現在の猪苗代湖の辺りには大昔には富士山のような大きな山があり、その山が崩れた跡に猪苗代湖が出来たと考えられています。

◆猪苗代湖とアサザ

アサザ

猪苗代湖は福島県内唯一のアサザ（浅沙）の繁殖地としても知られています。

アサザの花は一日のうち、日の高い時間帯しか咲かないのですが、無数の黄色い花が湖面に揺れる様子は見ていて幸せな気持ちになります。

アサザは北米では増えすぎて困っている地域がある一方、日本国内では絶滅が危惧されています。その名前は万葉集にも登場し、古くから日本に自生していたことがわかります。

アサザには雌蕊の長い花と短い花があり、異なるタイプの花同士でしか受粉出来ない仕組みになっています。

アサザと近い種類のイワイチョウという植物も同じ特徴を持っています。

難しい言葉では『異型花柱性』というのですが、株によって雌蕊の長さを変えることで自家受粉を防いでいると考えられています。

自家受粉を繰り返すと特徴の近い仲間ばかりになってしまい、病気が発生した際に全滅してしまう危険性があります。植物も工夫を重ねて生きているんですね。

猪苗代湖のアサザは７月下旬から10月上旬まで見ることができます。

イワイチョウ（長柱頭花）

ホタルブクロ

イワイチョウ（短柱頭花）

キンポウゲ

◆猪苗代ルート

新潟を離れて数年が経った頃、猪苗代スキー場の中を通る表登山口から赤埴山を経由して磐梯山山頂までの往復ルートを歩きました。

山頂までの所要時間は３時間半。登山道はスキー場敷地内の林道から始まります。季節は６月。日当たりは汗がにじむ陽気です。登山口の周辺にはホタルブクロやアズマギク、キンポウゲなど初夏の野草が咲いていて、林に入るとひんやりとした空気にほっとします。磐梯山は地形のバリエーションが豊かで、平地の野草から高山植物まで様々なお花に出会える楽しみがあります。二合目である1,430mの赤埴山山頂から見上げると、目指す大磐梯山頂はまだはるか上です。三合目、天狗岩までの間にある沼野平周辺では磐梯山の固有種、バンダイクワガタを見ることができます。

山頂に着くと猪苗代湖の全景が見え、湖面から爽やかな風が上がってきます。振り返ると裏磐梯の湖沼群が青い光を放って散らばっています。

◆「五合目」の不思議

通常、山には一合目から九合目までがあり、山頂は十合目に当たるものなのですが、磐梯山の山頂は『五合目』です。

では六合目から上はどこにあるのでしょうか？答えは富士山です。

これは明治・大正の時代に磐梯山の登山道整備に尽力した小林才二氏が磐梯山の標高（1,816m）が富士山（3,776m）のほぼ半分に当たることから大正２年に富士山山頂を十合目、磐梯山山頂を五合目と定めたことによります。

ところで、山を登っているときに二合目までは長かったのに、三合目まではあっという間だったな…足が慣れたのかな？と思うことはないでしょうか？実は気のせいではありません。この「合目」は均等ではないのです。

合目の決め方には諸説あり、一説にはご来光登山のために夜道を行燈を灯して登っていた頃、油を一合消費するごとに合目を定めていったと言われています。

また仏教の世界では登山を修行になぞらえています。『合』は仏教用語でとてつもなく長い時間を意味する『劫』に通じており、一合目から山頂（十合目）ま

での各合目ごとに位が定められています。山頂に近づくほど、極楽浄土に近くなり、魂の位も高くなっていくという考え方です。

一合目から順番に地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、修験道、人間道。ここまでが「地界」です。七合目からが「天界」で、天道、声聞道、縁覚道、十合目は菩薩道、ここまでが天界。さらにその上に『妙覚』と呼ばれる極楽浄土があります。

昔の人々は毎日生まれ変わる太陽を輪廻転生のシンボルととらえ、暖かさや光で作物を実らせてくれるお天道様に一番近い山頂の上に極楽浄土があると考えたのでしょうね。

◆磐梯山の植物

バンダイクワガタ

兜とクワガタムシ

バンダイクワガタはクワガタソウの一種で磐梯山の固有種です。青紫色の１cmほど５～10個、穂のように咲かせます。すっと伸びた長い雄蕊は、松本零士さんが描く女性（銀河鉄道999のメーテルのような）のまつ毛を思わせます。近い種類のミヤマクワガタ（植物の）に比べると、葉の切れ込みがより複雑でギザギザしているのが特徴です。

クワガタとは漢字で『鍬形』と書きますが、語源は兜の飾りの名称です。その起源は神の使いである鹿の角をかたどったものと考えられています。

戦国時代の武将たちは自らの理念や強さを誇示するためにこの鍬形に様々な意匠を凝らしました。その装飾の形とこの植物の果実の形が似ていることからクワガタソウと名付けられました。身近なものだとクワガタムシの名前の由来にもなっています。

ちなみにクワガタムシはフランスやアメリカでは鹿の角にたとえられ、『Stag beetle』（雄鹿虫）と呼ばれています。

◆アズマギクとミヤマアズマギク

アズマギク

ミヤマアズマギク

磐梯山はアズマギクの平地型と高山型の両方を見ることができる珍しいお山でもあります。アズマギクはもともと同じ祖先をもつ植物ですが、高山に進出したものは平地のものより背が低く、花が大きく、葉の表面には細かな毛があるように進化しました。

気温が低く風の強い過酷な環境、そして平地に比べると花粉を運んでくれる昆虫も少ない高地で出来るだけエネルギー

と水を節約して生きて行く為に体を小さく、花を大きくしています。

たまたま毛の多かったものが寒さを生き延びたり、高い所の葉っぱを食べようと努力するうちに首が長くなったり、進化って不思議ですね。

ミヤマアズマギクを始め、磐梯山は高山植物の宝庫。５月下旬～８月下旬ころまで可憐な花々を見ることができます。

イワハゼ

タカネナデシコ

イブキジャコウソウ

ミヤマキンバイ

ベニバナイチヤクソウ

ウラジロヨウラク

ムラサキヤシオ

ミヤマカラマツ

◆レンゲツツジ

レンゲツツジ

磐梯山の稜線で目にする植物にレンゲツツジがあります。レンゲツツジは鮮やかなオレンジ色が美しい日本の固有種です。標高500～1,000mほどの高原に育ち、６月上旬～中旬にかけて花を咲かせます。庭木や公園に植えられることもあるので、こどもの頃にこの花を摘んで蜜を吸った経験のある方もいらっしゃるのではないでしょうか？

美しい花とは裏腹に、レンゲツツジをはじめ、ツツジの仲間にはロードトキシンという毒が含まれます。この毒は特に牛や馬などひづめを持つ動物に対して強い毒性を発揮すると言われており、別名『ウシツツジ』『ウマツツジ』と呼ばれます。

ただ、動物たちは人間が考えるよりも賢く、放牧地にこのツツジが生えていてもきちんと見分けてきれいに残します。

ツツジを漢字で書くと『躑躅』です。難しい漢字ですね。

この言葉は「ツツジ」のほかに「てきちょく」とも読み、「足踏みをする」という意味なのだそうです。「誤ってツツジを食べた牛や馬が苦しんで足踏みをする様子」や、「ツツジの花が美しい為に人々がこの花の前で歩みを止める」ことから当てられた漢字だと言われています。

◆赤べこ

赤べこ

福島の民芸品を訊かれて一番に思い浮かぶものは赤べこです。赤べこは会津若松市でおよそ400年前から作られてきた幸運を運ぶ牛。首を触るとゆらゆらと愛らしく動く、厄除けや縁起物として人気の郷土玩具です。

私の家には牛がいるのですが、新鮮な草を持って行くと「早くちょうだい！！」と首を上下に振ります。なんだか赤べこの動きとよく似ていてかわいいです。

赤べこは「張り子」と呼ばれる工芸品の一つで、木型に何枚もの和紙を貼り重ね、乾燥させて木型を外すことで形作られます。（今日では工房独自の製法により再生紙を主原料に作られています。）

会津地方の張り子は1590年に領主の蒲生氏郷が京都から張り子職人を呼び寄せ、藩士たちに作り方を学ばせたのが始まりと言われています。

会津では反古紙（書き損じの紙）を張り子の材料として用いていました。紙が貴重な時代、書き損じにも新しい命を与えて循環させていく、昔の人々の心は現代のSDGsにつながるものがあると感じます。

「べこ」とは東北地方の言葉で牛のこと。アイヌ語で牛を意味する「ぺこ」が転じたという説や、牛の鳴き声「べー」に愛称として使われる「こ」をつけて「べこ」になったという説があります。

赤べこの牛にはモデルがあります。

いまから1200年あまり前の807年、徳一大師という高名な僧侶が圓（円）蔵寺のお堂のひとつである福満虚空蔵尊堂を建設していたときのこと、資材運びに難儀しているとどこからともなく牛の群れが現れ、手伝ってくれました。その中でも最後まで最もよく働いたのが赤い牛だったそうです。

この出来事から人々は赤い牛を縁起物と考えるようになりました。

また、赤色は太陽・血・炎など生命活動を連想させることから、全国各地でお祝い事や健康祈願、厄避けの意味で使われる色なのだそうです。なるほど、お赤飯や神社の鳥居などにも「赤」が用いられていますね。

赤べこの背にある白と黒の模様は当時流行が繰り返されていた疱瘡の治った後を表しています。疱瘡は天然痘ウイルスによって引き起こされる感染症で、発熱の後全身に発疹の現れる病気です。今でこそ治療法のある病気ですが、昔は幼いこどもの命を奪う恐ろしい病でした。赤べこの色使いには、赤べこが厄を引き受け、人々を守ってくれるという意味が込められています。

◆会津絵ろうそくの歴史

会津絵ろうそく

福島の夜を彩るあたたかな灯りが会津絵ろうそくです。白く美しい和ろうそくにフジやボタン、キキョウなど季節の花が描かれています。

ところで、ろうそくが生まれたのは紀元前1550年ころのエジプトだそうです。当時のろうそくには蜜蝋が使われていたと考えられています。ろうそく自体は残っていませんが、遺跡から燭台が見つかっています。

当時のろうそくは今のようにスティック状ではなく、容器の中に満たした蝋を燃料として明かりを灯す道具でした。

シルクロードを通って中国に伝わり固形のろうそくを作る技術が生み出されました。648年に編纂された『晋書』には固形のろうそくが使われていた記録が残っています。日本へは唐の時代、遣唐使が持ち帰ったと言われています。

唐の国から伝わったろうそくは蜜蝋で出来ていましたが、当時の日本にはまだ蜜蝋を安定的に得る技術がありませんでした。

そこで蜜蝋の代わりにハゼノキやウルシの実から採れる蝋を使って作ったのが

和ろうそくの始まりです。和ろうそくの起こりは遣唐使が廃止された894年ころのことと言われています。当初の国産ろうそくは松脂とぬかを混ぜて固めたもので、蝋は使われていませんでした。とはいえ、1000年以上も前からろうそく（に近いもの）が使われていたとは驚きです。1500年代の戦国時代に入ると今の和ろうそくと同じハゼノキやウルシの蝋から作られたろうそくが一般的になりました。もちろん当時のろうそくは非常に貴重で高価なもので、日本で庶民がろうそくを使えるようになったのは江戸時代の末になってからです。

わたしたちが今使っているろうそくは原油から採れるパラフィンワックスが主な原料です。いつも使っているろうそくって石油から出来ていたんですね～。

会津でろうそくが作られるようになったのは1400年代（室町時代）と伝わります。

当時の領主であった蘆名盛信がウルシの栽培を奨励しました。ウルシは樹液を漆塗りに使うことで有名ですが、その種子からは良質の蝋が作られます。会津のろうそくは織田信長にも献上されたと伝わります。

時は移り、秀吉が天下を治める安土桃山時代になると、会津の地に城下町が作られました。この頃、近江から招かれた職人の手によりろうそくに絵が描かれるようになったのが絵ろうそくの始まりです。江戸時代には最高級品として江戸城や大名の屋敷で冠婚葬祭に利用されました。また、冬になると仏壇に供える花の確保がむずかしい雪国の会津地方では冬の間、絵ろうそくが供花の代わりに使われていました。大正末期になると電気の普及で衰退の一途をたどりますが、現在でも郷土のお土産品としてその技術は大切に守られています。

わたしの大好きな植物も、伝統工芸も守り続けなければ消えてしまうものです。山を歩くとき、そして各地の工芸品に触れるとき、その美しさだけでなく歴史や置かれている状況にも興味を持って接したいと思います。

◆自己紹介

わたしは岩手県八幡平市にある八幡平マウンテンホテルでフロントスタッフと登山ガイドをしています。生まれはすぐ隣の盛岡市です。実家の周りには民家も数えるほどしかなく、友達の家も遠かったので、学校から帰るといつも森や野原で遊んでいました。私の子どもの頃は熊など話題に上ることもありませんでした。野イチゴを摘もうとしてアシナガバチに刺されたり、口に入れた木の実の渋さに顔をゆがめたりしながら、森の生き物たちと同じようにして、危ないことも楽しいことも学んだように思います。

現在は山を歩いていて発見したことや、皆さんに見せたい美しい景色や植物を『もとよのお出かけ日記』にまとめてマウンテンホテルのロビーで公開しています。お越しの際にはお手に取っていただけると嬉しいです。

もとよのお出かけ日記

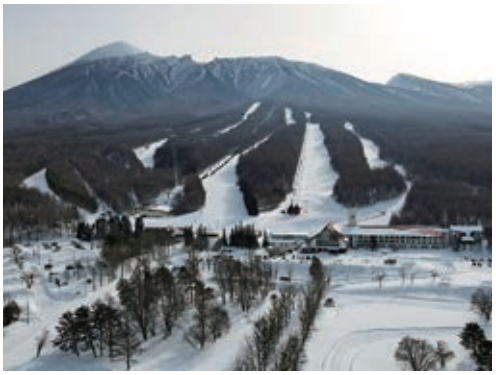
◆八幡平マウンテンホテルのご紹介

私の勤めている八幡平マウンテンホテルは岩手県の最高峰、岩手山の麓に位置しています。夏場はトレッキングの拠点として、冬場はスキー場も営業しておりますので、ゲレンデを楽しむお客様でにぎわいます。

日本山岳ガイド協会認定ガイドが在籍しており、観光やトレッキングのご相談にも応じます。スキー場は２か所あり、

ホテル直結の『パノラマスキー場』は緩斜面が初心者の方やご家族連れに人気です。ツリーランや急斜面を楽しみたいお客様向けの『下倉スキー場』へはホテルから無料シャトルバスで10分の距離です。八幡平へお越しの際には四季を通じて豊かな自然とふれあえる当館へ、ぜひ遊びにいらしてください。

八幡平マウンテンホテル



パノラマスキー場

下倉スキー場

八幡平マウンテンホテル
〒028-7302
岩手県八幡平市松尾寄木1-509-1
TEL：0195-78-4111
E-mail: info@trs-h.com
HP: www.hachimantai.co.jp